

出会った人々 II

そろそろ登場いただくのが、同じ世代で何かとお世話になった。松岡環さん。

出会いは、学期初めの頃、隣の上級クラスから我々が属する初級二班の教室に来て、何やら植松・長井両氏とああでもないこうでもないと話していた女性。この土地での中国語学習は初めてではなく、学び慣れた学び舎にいる風情だった。何と宿舎の部屋の位置が私の斜め迎え。そこで学食に行く時、誘われたり誘ったりすることもあった。日本では大阪の小学校で教えているとのこと。6月末まで休職してこちらに来ていた。眼鏡が良く似合う、可愛いおばあちゃまといった風貌だった。

松岡さんは、何冊か日中戦争期の現地人への虐殺事件などをテーマにした本を刊行している。日本での保守的な人々が嫌がる、彼らが自虐的と呼ぶデリケートな問題を長く追っている研究者でもある。何度か南京にも滞在し、現地に存命だった虐殺の被害者や目撃者にも話しを聞いて来たそうだ。こういう問題はかなり重いテーマだが、滑らかな大阪弁の活舌で話されると、それほど嫌味はなかった。実際に日本軍の被害にあった人たちを探し出し、直に証言を聞くと言うのは、相当行動力が旺盛だからだろう。そのパワーはすごいと思う。

21世紀になっても、戦時中の日本軍人の加害行為は論争的だが、要はその地で虐殺などがあったのかは、現地の人々の証言こそ、第一次的な資料だと思う。その意味での松岡さんの行動に、私も敬服する次第だ。片や、虐殺は幻しだと言う人たちも少なからずいる。※1その対極に犠牲者30万人という中国側のプロパガンダかと思ってしまう主張もある。こうした食い違いは最後まで残るだろうが、結局真実は事実在即していなければならない。その作業として、現地の人から証言を集める行為は評価されてよいと私は思う。

※1 鈴木明氏の『南京虐殺のまぼろし』という本を読んだ。疑問に思うのは、加害者とされる日本軍将兵の証言中心に本が構成されていること。鈴木氏は、人間の本性を善とだけ見ているのか、日本兵が事実を隠す可能性を否定しているようだ。人は嘘をつくと思う私には、理解できない面があった。

松岡さんのお誘いもあって、大連では日本語を学ぶサークルにしばしば出入りした。初めは自らの拙い中国語では意義を感じずお断りしていたが、途中からは進んで参加することもあった。しかし、参加者の中国語を聞くよりこちらの日本語を聞いてもらうことが、どうしても多かった。現地の参加者は年配者は少なく、日系企業で働いているため日本語に関心がある人とか、近く日本に派遣されるので、日本語力をさらに高めたいと言う人などが、男女を問わずいた。場所は街の大きな喫茶店だとか、サークルを主宰しているソフトウェア会

社の一室だとか、土日に出かけることが多かった。

大学内でも、大通りの黄河路を越えた南院キャンパスにある日本語科の月例企画で中国人学生と日本人学生が会話を交えるイベントがあり、こういう場にも誘ってくれた。写真は、そうした企画で日本語科の学生達との交流の際、主催者の野口先生が撮ってくれた一枚。



私の右隣の女学生は、四年生で、昨年日本の佐賀大学に留学した経験話を話してくれた。